

東京芸術大学美術学部1970年 学内景観の一変 相次ぐ改築

佐藤道信

日本近代美術史。主要著書『日本美術 誕生 近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術 美の政治学』

さてこの第八回は、一九七一年から始まる十年の号である。この一九七〇年代は、旧校舎の相次ぐ改築で、学内景観が一変した時期だった。ただ、そのポイントは一九七〇年に始まったため、そこから話を始めることにしたい。

一九七〇年二月、美術学部内の北西端に、地上八階建ての高層棟が突然現われた。油画と日本画が入った絵画棟（ ）である。まだ木造校舎ものこっていた校内の風景は、どこからでも見えるこの建物の出現で、大きく変わった。いまでもこの絵画棟は、上野校地の最高峰だ。ただでも周囲より少し高い上野の山にあるから、よけい高い。上層階から見える景色は絶景で、とくに夜景は高級ホテルのラウンジなみ。いまはやりの夜景がウリの高級マンションでもいけそうだが、でも専門棟だから、見られるのはその人だけ。うらやましい。私のいるすく



美術学部全景（2001年）

となりの四階建ての建物は、ここから見るとうすくまっ
ているように、悲しい。

震災と戦災をまぬがれてきた戦前からの校舎も、戦後になると、さすがに老朽化が目立ちはじめた。一九五三年から始まった改築計画で、六〇年代にまず工芸棟（六二年）、（ ）と、附属図書館・芸術資料館（六五年）が完成。音楽学部の改築も、この頃から始まった。そして七〇年代に入ると、美術学部の旧校舎の改築がいつせいに始まる。この十年間は、いつもどこかで工事をしている状態だったが、ここで現在にいたる学内景観ができあがったのである。

絵画棟について、翌七二年に彫刻棟（ ）七四年に中央棟（ ）七九年にデザイン棟（ ）が完成。音楽学部内の学生会館（七九年）や事務局長棟（本部、七八年）、奈良の古美術研究施設（七二年）、石神井学生寮（七五年）なども、すべてこの時期につくられたものだ。いまの中央棟から彫刻棟にかけての場所には、東京美術学校時代からの本館があった。この建物が取り壊されるときには、卒業生の有志による「本館にさよならする会」が開かれ



- 美術学部構内
美術学部絵画棟
" 彫刻棟
" 金工棟
" 工芸・デザイン・建築棟
" 中央棟
附属図書館
旧芸術資料館
陳列館
正木記念館
大学美術館
第1守衛所
（『2003年度東京芸術大学概要』より）

た。全国から約二〇〇〇人におよぶ教育、同窓生が集まったという。その際、せめて玄関だけでも残そうとなつて移築されたのが、いま陳列館（ ）と正木記念館（ ）のあいだにある旧玄関である。

美術学部の各科の棟は、敷地内をぐるりと取り囲むように配置されている。超高層がブームになった当時、絵画棟のほかの建物も、高層になるかと思われた。が、そうはならなかった。高さ十五メートル制限の公園法があったからである。絵画棟の場所は、学校の敷地内ではあったが、公園の外だったらしい。戦後は、大学院の新設による学生数の増加、作品の大型化などで、学内スペースは狭くなる一方だった。それを高層化でクリアできなかったことが、のちの取手校地の開設（九一年）につながっていく。

そして、こうして建てられた建物も三十年がたち、いま再び改築の時期を迎えている。大学美術館の新設（九九年）、（ ）総合芸術棟への改築（〇四年）など、学内景観もまた二十一世の姿に変わりつつあるのだ。

（佐藤道信／美術学部芸術学科助教授）

タイムカプセルに乗っ



「東京芸術大学創立90周年記念 楽器展」(展示目録)

東京音楽学校では、明治二十年(一八八七)の創立以来、教材としてあるいは貴重な歴史資料として、楽器を購入している。その孜孜たる努力によって、現在で質と量とともに充実したコレクションができて上がっている。

こつした収集品の最初の展示会は、大正五年(一九一六)十一月に行われ、期間中の十一月十六日には、「皇后行啓演奏会」が催された。当時、音楽学校の校友会が発行していた雑誌『音楽』によると、生徒たちが「君が代」を合唱するなか、皇后陛下は「玉座」に着かれ、第一部の幕が開いた。「早春賦」の作曲者として知られる中田章のオルガンの独奏に始まって、長坂好子はソプラノ独唱、のちに悲劇的運命をたどった久野ひさ子はピアノ独奏、信時潔はルービンスタインのチェロ・ソナタを演奏している。その第一部終了後、第二部が始まるまでの休憩時間に皇后陛下は、「湯原校長の御先導にて新館に玉歩を遣はせ給ひ」、別棟で催されていた楽器展をご覧になった。展示会の詳細は、記録が消失していて不明だが、このときの展示品は楽器だけではなかった。雅楽、能楽、声明などの古文書も含まれていた。

それから六十二年を経た昭和五十二年(一九七七)東京芸術大学音楽学部はその前身である東京音楽学校時

代から数えて、創立九〇周年を迎えた。この記念の年の大きな行事の一つに、十月一日から三十日まで開催された「楽器展 ―東洋の音・西洋の音―」があった。選ばれた楽器は、その頃の教授陣の専門分野を反映している興味深い。バロック時代の楽器、ヴィオラ・ダ・モーレは、ヴィオラ専門の浅妻文樹教授の発案であった。トランペットの中山軍士雄教授は、ルネッサンスやバロック期の管楽器を担当された。傑出したフルーティストであった吉田雅夫教授は一八世紀から二〇世紀までのフルートの歴史がわかるように、クヴァンツ・モデルの一鍵のものからベーム式のものまで体系的に示された。アジア・アフリカにフォーカスをあてたのは、民族音楽研究の代名詞ともなっていた小泉文夫教授である。

東京芸術大学音楽学部1977年 芸大創立90周年 記念「楽器展」

瀧井敬子

音楽学(ドイツロマン派、および日本洋楽草創期の研究) 主要論文「F・ダーフィットのエストニア時代」、著書『漱石が聴いたベートーヴェン』

朝鮮の弦楽器と共に、「東アジアの箏琴類」というカテゴリーのもとで展示された。イラクのジョーゼとルバーブは、明清楽の携琴や故琴、そして胡弓と共に、「アジアの弓奏楽器」として一つのグループにされた。また、いわゆる「ビルマの豎琴」、サウンガウは、東アフリカとアフガニスタンのハーブと比較できるように陳列された。北インドのシタールやサーランギーは、「共鳴弦を持つ弦楽器」として、ヴィオラ・ダ・モーレと同じコーナーに並べられた。

(たさい・けいこ/演奏芸術センター助手)



左: サランギー
上: 「ビルマの豎琴」サウンガウ